



文芸随筆

2020

No.

50

令和  
特集

日本文芸家クラブ



# 目次

## 巻頭言

やるべきことは何か

志茂田景樹—— 2

## 第一章 特集 令和

新たな時代に

睦月影郎—— 5

庭梅の咲く風景

秋山登喜雄—— 8

海賊王になれる？

小川 洋—— 11

令和の熱海の梅

冴月さくら—— 15

令和という個人主義の時代

桜井真琴—— 19

移ろい

小鳥遊 葵—— 23

令和元年12月26日のこと

田 幸樹枝—— 29

新時代の決意

原 誠—— 34

節目

矢月秀作—— 37

## 第二章 自由題

オネエ言葉

芦川淳一—— 42

金沢は文学的香りが溢れる街

工藤哲椰—— 45

乳首の価値は

橘 真児—— 48

恍惚の人

聖 龍人—— 51

虫地蔵

三山 冽

(北山悦史)—— 56

近隣相似の罪則

藪野 豊—— 61

★水パイプをくゆらすクウェートの人達

川田きし江—— 67

表紙イラスト

とやまみーや

## 巻頭言

やるべきことは何か

日本文芸家クラブ会長

志茂田景樹

この稿を書いている時点で、日本は非常事態宣言下にある。人との接触を8割削減したくても外出しなければ仕事にならない人も多いだろう。勤務先が休業でやむを得ず自宅で自粛の人も少なくないだろう。

本来、在宅ワークの人への書き、画業の人の殆どはこれに該当する。も宣言に及び腰の周りの空気に染められてストレスをためているだろう。

在宅ワークの人ほど仕事に区切りがつけば、夜の繁華街に身を鎮めたくないものである。

それはともかくとして、すべての人が、とあえて言っておきたい、経済的にマイナスを負うだろう。それ以上に、精神にマイナスを負うに違いない。目下の宣言委は期限が設けられている。しかし、それを持って自粛解除、無罪放免とはならないと思う。

この稿が会員の皆様に触れる頃はどうかになっているか。今回のウイルスはしぶとく、そう簡単に終息させられないだろう。

私達は覚悟すべきだろう。それはチャンスを生む覚悟である。

それは自粛をチャンスとして捉え、こんなチャンスは2度と訪れないものとして感謝して、自分をこれでもかこれでもかと思つめ直すことである。誰だって自分を見つめたことは何度もあるだろう。

しかし、現実の流れに妨げられて中途半端に終わっていないか。今回は現実の流れが妨げにならず、トコトン見つめてみる、ということである。

きっと、自分の新たな可能性に気づくという意味で、すばらしい発見に行き当たるはずである。

第一章  
特集  
令和

新たな時代に

睦月影郎

令和になり、ちょうど私の作家生活が四十年になり、著書も六百冊になった。おりしもデビュー以来の思い出エッセーとエロ雑誌史の原稿に取り掛かり、日記を読み返しながら懐かしい日々を綴っている。

アクション小説や時代ものを書いては応募していたものの全て落選し、官能を書いたら一発で入選したこと。

原稿用紙に万年筆での手書きからキイボードになり、パソコン通信を始めて、やがて紙が要らなくなり、メール入稿が当たり前となった。

以前は下書きもコピーも撮っていなかったのに、編集や郵便局員が原稿を失くし、数々の悶着があったが、今では有り得ないトラブルになっている。

もちろんスマホもなかったの、不在のときは大事な電話連絡に気づかなかったり、撮っておけば良かったと思える場面にも数多く遭遇していた。

仕事が増えるとマンションを買って車を買ひ、ネコを飼ったり、婚約して破談になったり車を手放したり色々あった。

マンションのローンを組んだ途端に、メインで書いているSM誌が五冊も相次いで廃刊になって青くなり、ブームになったロリコン雑誌に書くようになると、平成元年の宮崎勤事件でロリもダメとなった。

そんな時に救ってくれたのが文庫本で、特にケイブンシャのグリーンドア文庫は年に六冊も刊行してくれた。

一方で幼かった頃のマンガ熱も甦り、持ち込んだ「ケンペークン」が連載になり、たまに自分のエッセーなどに付けてイラストも描かせてくれるようになった。

そして家を新築して、またローンを組んだら何と年六冊出してきていたケイブンシャが倒産。

何か大きな買い物をする、必ず悪いことが起きるものだ。

しかし私の場合、さらに良いことが待っているのである。

「ケイブンシャが無くなったのだから、うちに書く時間はあるでしょう」

と、徳間、廣済堂、学研などが続々と声をかけてくれたのだ。

さらには初の時代官能を書いて、祥伝社に持っていくと、すぐ文庫になり、長いシリーズを書かせてもらえるようになった。

かくて、転職したり副業を持たなくても、専業の官能作家で何とかやってこられたのである。

デビューの頃とは時代も変わり、タイトルで良い洒落を思いついても誰かがネットで言ってしまう、やりにくい部分もある。

だが私は今が一番良いと思っている。

過去を懐かしむ話は何度も書くが、今を目指してきたのだから、実際に過去に戻りたいとは思わない

令和になり、今度もまた世の中は変わっていくことだろう。

しかし、私が書き続けることに変わりはなく、きつと十年後も同じ気持ちでいるのだろうと思っているのだ。

## 庭梅の咲く風景

秋山登喜雄

1

今年も、また庭梅の剪定をしました（このことは、毎年欠かさず、行っています）。

かれこれ二十年以上も育てている、我が子といっても過言ではない庭梅……。

思い返せば、子供の頃、朽ちかけの小枝を拾い、何気なく庭に挿したところ、いつの間にか根付いてしまいました（その頃は、まだ庭梅だとは思いませんでした）。

それ以来、低木となって、今に至ります。

そして、毎年欠かさず、赤い花を咲かせるようになり、今も元気に育っています。

そんな庭梅の咲く風景を、私はいつも楽しみにしているのです。

2

そんな私なのですが、毎日のように読書をしたり、様々な学問を研究したりと、多忙な日々を送っているのです、たまには庭に出て、外の空気を吸いながら、庭梅等の手入れをするのも良いかなと思っています。

気分転換にもなるかと、思いますし……。

閑話休題、元号が『令和』になってから、大分経ちました。

その間に、悲しい事件や出来事が次々に起こり、世の中を嵐の如く吹き荒れた感があります。

- ・ 登戸の児童無差別殺人事件
  - ・ 京アニ放火殺人事件
- 等々……

その中でも、特に京アニ（京都アニメーション）の事件には衝撃を受けました。最初の一報を、テレビで知った時は、信じられなかったほどです。

深夜アニメのファンとしてだけでなく、犯罪を憎む気持ちが強い私としては、怒りと悲しみを抱かずにはいられませんでした。

もちろん、他の事件や出来事に関しても、同様の感慨を抱いていますが、京アニの事件は、令和になってからの、（私の中での）一番の衝撃的な事件だったので、

それだけに、今後も同様な事件が起きないことを、祈りたい気持ちで一杯です。

海賊王になれる？

どんな業界でもそうかもしれないが、特にメディア業界において、何かが新しく生まれた時にはそこに不思議な磁場が発生している気がする。

新しい伝達手段、新しい表現方法は当初「いかがわしい」あるいは「低劣」と見られる傾向がある。映画にしても、テレビにしてもそうだった（もちろんその時代を生で知っているわけではないが）。考えてみれば、漫画もアニメも、さらに言えば江戸時代の草双紙もそうだったかもしれない。だがその「いかがわしいもの」に魅せられた物好きな人々が集まってきて、まだ方法論も確立していないことをいふことに、新しい表現、新しい内容を試行錯誤する。求心力と遠心力が同時に存在する混沌の状況は渦を徐々に大きくして周辺を巻き込んでいく。小さかった頃には強

小川 洋

烈なパワーを持つていた渦も、大きくなるにつれ安定化し、ひとつの確立された存在と認められるようになっていく。そしてビジネスとなくなっていくのだ。

それはさておき、平成という時代は、経営学が幅を利かせた時代だったので、と思うことがある。もちろん、それ以前から経営学は研究されていたし、それなりの評価は得ていた。しかし平成に入り、不況の影響もあつてか、日本のあらゆるところで経営学的な用語がはびこるようになった。MBA、KPI、選択と集中、コア・コンピタンス、成果主義などなど……。

パソコンなど情報提供や情報処理の手段がたやすくなり、ビジネスの判断は数字をもとにすることが正しいとされるようになった。「効率化」がスローガンになり、「無駄の排除」が正義となった。

出版界においても状況は同じ。データに基づく部数決定は当然、企画の可否にもデータが求められるようになった。

だが、新しいもの、未知のものにはデータは存在しない。データ至上主義にとって未知のものは存在が許されないのだ。空振りをしてはいけないのでバットは振ってはいけない。四球を待ち、バントで送る。リスクの高い盗塁などもってのほか

だ。いかかわしい新しいものにこそパワーが渦巻いているなんてただの夢想だ。排除すべき無駄以外のなものでもない。

パレートの法則もしくは働きアリの法則と呼ばれる経験則がある。働かない二〇パーセントのアリを排除すると働いていたアリの二〇パーセントが働かなくなる（普通は逆の働くアリで語られるのだが）というものだ。効率を求めて無駄を排除しようとするのが無駄を増やすという矛盾。無駄と思われるものの中にこそ新たな芽生えがあるかもしれないのに。

そもそもメディアという怪しげな業界で働きたいと考えること自体、本来まともではない。何か面白いこと、新しいことがやりたいから後先考えずに飛び込んでいた。だが、業界が世間的に認められまともな職業と見られるようになって、企業も優等生を採用するようになり、働く人々も世間で常識とされる判断基準に従わなければならないようになっていった。

平成の時代は「正しい」ことが求められ、特に産業分野ではその「正しさ」の基準は経営学であった。必要なことであったかもしれないが、それで人々は幸せになれたのだろうか？

人々がなんとなく「正しさ」に疲れ始めている、と感じるのは私だけだろうか。さまざまな産業で閉塞感が漂い、SNSでの正しさの押し付け⇨炎上の多発にはうんざりしている。

時代は令和に移った。すぐにはないかもしれないが、時代のパラダイムも変化していくだろう。それがどんなものになるか予測はできないが、その変化の中で、どのようなしたら「混沌の渦」を生み出していけるか、考えていきたい。

若者たちよ、それを担うのは君たちだ。混沌の海を乗り越え、「海賊王」になるのだ！

令和の熱海の梅

冴月さくら

熱海市では、新元号が「令和」に決まったことを大いに喜んだ。なぜなら、「令和」の典拠が『万葉集』巻五の「梅花調州二首并序（梅花の歌三十二首、并せて序）」にある一文だからだ。

この序文は、天平二年一月十三日、大宰府の長官である大伴旅人の邸宅で催された「梅花の宴」の様子を表していると言われている。作者については大伴旅人や山上憶良らだとされている。

原文は、

于時 初春令月 氣淑風和 梅披鏡前之粉 蘭薫珮後之香  
書き下し文は、

時に初春の令き月、氣淑く風和み、梅は鏡の前の粉を披き、

蘭は珮の後の香を薫らす。

(佐々木信綱編 『新訓 万葉集』 上巻)

ここから、令と和が拾い出され、「令和」になったと、元号が決定した当初はあちらこちらで解説文を目にした。

では、なぜ熱海市が喜んだかという点、熱海市の花が「梅」であることが一つ。そして、毎年上皇の誕生日(十二月二十三日)に梅の枝を献上しているからだ。皇室と梅と熱海に元号が加わったわけで、それ、熱海の時代が来た、とばかり浮かれたのだ。

献上される梅の枝は、一八八六年(明治十九年)に開園した熱海梅園で咲く紅梅白梅である。紅梅は「八重寒紅」、白梅は「冬至梅」で、市の職員の手で切り取られ、宮内庁に運ばれる。令和初の献上梅は、十二月十六日に切られ、誕生日に見ごろになるように管理され、二十日に宮内庁に持参した。一九六九年から毎年献上されている。例年なら花をつけていて、日本一の早咲きの梅を自負している白梅は、天候不順の影響か、蕾がほころぶ程度だったと聞く。

令和になってからの熱海は、台風や大雨で、断水や土砂崩れの被害があった。令和元年十月の台風十九号で市内の半分以上が断水になり、自衛隊の給水車が熱海市をくまなく回り、給水時間を告げる広報がひっきりなしに流れていた。温泉があるので、風呂には困ることはなかった。日頃、千円から三千円の日帰りの入浴料を取る旅館・ホテルも、五百円で立ち寄り湯を開放。トイレも温泉水を利用した。一週間で復旧したが、飲み水の大事さを思い知らされた一週間だった。私の住んでいる地区は断水にはならなかったが、建物に大きな貯水タンクがあり「我が家は大丈夫」と言い切っていたマンション住まいの知人が、タンクが空になって急に断水になり、「水を分けてくれ」と、突然訪問してきた。その手にはポリ容器が二つ。給水車を待てばいいのに、と思いつつも水を入れてやった。その知人は、並ぶのが大嫌いな人である。

令和の令は「よい」と読む。令和元年は私にとって「よい」とはいいがたいものであった。出会いと別れ、特に別れが多かったからだ。

親密な付き合いをしてくれていた人たちとの別れが多く（寿命といえればそれまでの人たちですが）、心にポツカリと穴が開いたまま年を越した。出会いもあったが、その穴を埋めるほどのものではない。このまま、穴が広がったら、私もそこに落ちてしまうかもしれない。中島みゆきの歌ではないが、別れと出会いを繰り返して時代は巡ると思うのだが、いびつな巡り方をしそうである。

一月十一日から熱海梅園梅まつりとあたま桜系川桜まつりが開催される。早咲きの年もあれば、遅咲きの年もある。暖冬の影響で開花の時期が例年とずれてきているのだ。梅園の梅が満開になる頃には、令和が梅や万葉集に関係あったことなど、熱海市民の頭からは、すっかりと抜け落ちていることだろう。

「令和」が発表された四月一日には、梅園の梅は終わっていて、某観光関係者が、「せめて、梅まつりの最中に発表してくれたらなあ」

と、ボソッと口に出した言葉を聞いた覚えがある。平成最後の梅まつりには間に合わなかったのだ。世の中、そう都合よくいくものではない。

## 令和という個人主義の時代

桜井真琴

令和という平成や昭和よりも実態がつかみにくい時代がやってきましたね。

というのも、私がそういった仕事も手がけているせいかもしれませんが、新しい職業の人間が、私のまわりにどんどん増えてきているので、カオスの様相です。

動画サイトのユーチューブに動画を載せて広告費を稼ぐ

「ユーチューバー」や、

テレビゲームで大会に出て賞金をかせぐ

「ゲーマー」やら、

事務所に入らずにフリーランスでツイッターなどを使ってお客さんを集う、

「個撮（個人撮影）モデル」

などなど。

正直言えば「それが仕事なの？」と、私も首をかしげておりました。

そんなものは一時的な流行で、すぐ廃れるだろうと。

しかし、私も作家をしながら、SNS広告という仕事をしておりますので、仕事柄そういう実態を調べてみると、想像もつかなかった巨大ビジネスになっているんですね。

ユーチューバーなる人々のトップクラスが年収数億なのは知っていたのですが、その管理事務所が単年で百億以上の売り上げを出していると知って、いや、これはちょっと洒落にならないなあと、思ったわけです。

実は今、テレビ局の裏側では、このユーチューブに参入しようとする動きが加速しています。

つまり、フジテレビやテレビ朝日というテレビ局が、テレビという媒体を介さずに、コンテンツ配信事業に変わっていく、という動きです（その際、テレビは今のラジオのような、ニッチな媒体になるかもしれません）。

信じられないでしょうが、今の若者は本当にテレビを見ないし、テレビのことをこれっぽっちも信用していません。

見るのはネットニュースにユーチューブ、友達とのラインなどのやりとり、なのです。

今の若者は、本当に狭いコミュニティのことしか興味がありません。

「桜を見る会は不正だ」「イランとアメリカで大変なことになっている」と、メディアがどんなに煽っても、そもそも新聞もテレビも見ないので、若者たちはまったく躍らされないのです。

そもそもテレビというのは、今、若者の実態をどこまでつかめているのでしょうか？

例えばテレビで「景気が悪い」と散々訊かされているのですが、正直、私の周りでは実感がまったくありません。

まあ少子高齢化は間違いなので、様々なことがミニマムにはなってきているのでしょうが、それでもあれほど煽るほどの景気低迷の実態がないのです。

というのも、こうした動画配信や、インターネット絡みの仕事では、慢性的な人手不足で、プログラマーや動画制作のできる会社は引く手あまた。

コミケと呼ばれる「コミックマーケット」で同人誌は売れ、ツイッターで四コマ漫画を書く人が出版すれば売れるという時代になっています。

私の（四十代）の年齢でもこれですから、さらに下の世代が不況など感じるわけがありませんね。

大企業のリストラがあり、仕事がAIに奪われると不安を煽るテレビですが、彼らが知らない世界は、残念ながらどんどん広がっています。

私は、令和という時代は「個人がテレビなどのメディアを追い越してしまう」といっていいのだからと思います。

いまや個人が自分の力で稼ぐ時代であり、やる人間とやらない人間の格差、というのがどんどんと顕著に表れる、努力の時代なのだなあと思うわけです。

移ろい

元号が平成から令和に上書きされた。

昭和生まれなので、これで平成、令和、と生涯二度も改元を体験したことになる。年齢的にみても三度はないだろう。もっとも、二度も体験したのだから、充分ではある。

小学校、いや、高校ぐらいまでは六十代の人を見ては「爺さん」と呼び、老いた姿にすぐそこに迫りつつあるその爺さんの死が見えているような気がしていた。

若かった私には別世界を感じて、自分がその年代になることなどまったく想像もしていなかった。周囲には何しろ、九十度ならまだいいほうで、顔が地面につくほどに腰の曲がった六十代の爺様たちがあちこちにいた。

小鳥遊 葵

そんな六十代は十代の眼には、もう水分も吸わなくなった枯れ木のように干からびた生物だったのだ。

事実、当時は六十代で死に到ることは珍しくもなかった。けれど、今の私はその六十代を超えた。しかもアツという間もなく六十代を一気に飛び越えた。

そんな私たちを見て、今の若い子たちも昔の私同様に、もうすぐあの世へ連れ去られる爺いたち、とやはり見ているのだろうか。時折、そんなことを考える。

過去など振り返るな。必要なのは「今」であり、「明日」からの未来。よくそう説く人がいるが、私はしかし、過去が懐かしいし、愛しい。その中でも昭和がいい。

平成は頑張って手練り寄せないと鮮明な画は出てこないけれど、昭和は昨日のことのように鮮やかな画像が、順序良く脳裏に並ぶ。それはおそらく、ずっと昔の古い記憶ではあっても、今の萎びた脳ではなく、当時の若い脳が記憶した光景であるせいだろう。

とくに上京してすぐの映像はまるで宝物のように私の記憶のど真ん中に居座り続けている。

今言うとは必ずや嗤われるだろうが、上京の目的は役者になることだった。とはいえ、当時から自分の容貌のひどさは充分すぎるほどに自覚していたので、むろん、二枚目役が自然に似合う俳優やタレントなど望む気にもならなかった。

脇にいて存在感が出せるいぶし銀のよう役者——それも舞台上で演じる役者を夢見ていた。

それに向かったの助走はほぼ順調だったように思う。

私は上京してすぐ、ツテ頼りに、横須賀は佐島にある「佐島マリナー」というヨットハーバーに働き始めた。そこは森繁久彌がオーナー社長で、専務と常務が長男と次男だった。

私が配属されたのはオーナー森繁久彌が個人所有している「ふじやま丸」という、当時でも今でも珍しい、鉄製のクルージングヨットで、百トンもある豪華クルーザーだった。メインマストが二十一メートルあり、キールの深さが四、五メートルもある。レースには不向きだが、レジャーボートとしては一級品だったろう。

そこで私は好きなヨットを操り、給料をもらっていたのだから恵まれた環境にいた、と自覚しつつも、しかし、目標はあくまでも舞台役者なので、なかなか訪れないチャンスを待ちながら苛立つ日々を送り続けていた。

初夏のある日、そのクルージングヨットに社員を乗せての、伊豆下田までの慰安旅行があり、大将も同行した。下田の宿での宴席が始まり、芸能界の大御所は芸者さんから三味線を借り、数十分独演し、社員を愉しませていた。

それが終わると座はアルコールに浮足立った社員たちの声で騒然となり、その中、最も末席に坐る私の耳に、オヤジが一曲唄え、と言っている、との伝言が伝わって来た。

私は千載一遇のチャンスとばかりに昂ぶり、立ち上がるとすぐに唄い始めた。けれど、その場の凄まじい喧騒の中、いくら大声を張り上げても、上座に鎮座する御大の耳には届くはずもない。

数分後、もう一度廻り伝わってきた「声が通らない」の理不尽とも思える御大の一言により、テストに不合格の烙印を捺されたような気分になり、かなり落ち込んだ。私には多少、いや、かなり、歌唱には自信があったのだ。

それなのに、御大の三味線芸には咳一つせず聴き入っていたときは違い、私が唄い始めると聴く耳持たず騒然とする社員たちの顔を一人一人撲りたいような憤りを感じたものだった。

しかし、振り返るまでもなく、取るに足らないどうでもよいような出来事だった。けれど、当時の私には初体験の挫折であり、大きな衝撃だった。唯、今思えば、挫折でも何でもなく、単に才能のなさを糊塗した言い訳でしかない。

唄でも芝居でも、どこかに光るものがあれば、自然に周囲の騒がしさも小さくなり、後押ししてくれた人がいたはずだからだ。唄が上手い、と自負していたのは、単なる幻想だったのだろう。

それから二十年。私が書き物をし始めたのは四十歳になってからだ。それまでは文学青年でもなかったし、何故突然、小説など書く心境になったのか、これもまた今一つははっきりとは記憶していない。ずっと根無し草のような日常だったので、書き始めたのもおそらく、ほんの思いつきか、気紛れだったのだろう。

むろん、作家になれる、などと夢にも思わなかった。それでも書く物の評価は知りたく、よせばいいのに書き始めた年に書き終えるや片っ端から応募してみた。それがいけなかった。その応募原稿が地方文学賞と、今はないが、ある「官能小説大賞」にひっかかった。うん、それがいけなかったのだろう。

今度は「作家になどなれるはずはない」と思っていたのに（なれるかも知れない）に気持ち動き、今に到る。

昭和、平成、令和。私にその次はもうないだろうが、官能にしろ一般小説にしろ、私自身が満足する物が書けるかどうか。いや、それは少し違う。生涯で、私に売れるものが一つでも書けるかどうか。

生意気にもそんなことを考えてはいるが、相変わらずの根無し草で、性根の定まらない自分には、絶対に無理だろう、との結論に到りながら、何百もの売れる作品を書き続けている先輩諸氏の旺盛なエネルギーと才能に日々、羨望とため息を繰り返している。

令和元年12月26日のこと

田 幸樹枝

「ふうふううっ」

蝋燭の火が吹き消された。

「けせらんぱさらん、とーんでけ」

師走の早朝の街では、慌ただしい音がガラガラゴロゴロ聴こえて来ていた。其の街の片隅で、おそうじ魔女のエンデインが、箒を一振りすると、ケーキ屋さんのクリスマスツリーや雪の結晶、赤いリンゴやリボンの飾り付けが、消えてなくなつた。一方の街の片隅で、飾り付け魔女のスターティンが箒を一振りすると、紅白餅の飾りや金銀の扇子や羽子板、俵ネズミが街角に現れた。

二人の魔女は仕事を終えると、街の隅っこに残っていた「ひとりぼっちのクリスマス」や「今年もまた終わっちゃう」といったクリスマスタルたちを大事そうに拾い集めた。

「此のクリスタルたちは、ワタシの箒でもお片付けできないのです」

エンデインが云った。

「そして此のクリスタルたちは、ワタシの箒でも次の扉開くことができない子たちなのです」

スターティンが云った。

「だから」

「いつも涙でキラキラ光っているのです」

「子どものクリスタルばかりではありません。此のところ、大人のクリスタルやお年寄りのクリスタルも増えているのです」

二人の魔女の顔が曇った。

「さあ、赤鼻のトナカイよ、帰りの櫓に此のクリスタルたちを乗せますよ」

「エンデインスターティン、今年は、また沢山のクリスタルが集まったんですね」

赤鼻のトナカイの鼻が、一層赤くなった。

其処へ仕事を終えたサンタクロースが帰ってきた。

「年々「ひとりぼっちのクリスマス」が増えておるな。令和元年のクリスマスは平日だったから、特にな」

橇の鈴を袋に仕舞いながら、サンタクロースの顔も曇った。

「ああ、ワシの仕事は一体何なのだろう。子どもたちは、あんなにワシが来るのを楽しみにしてくれているのに、悲しみのクリスタルが年々増えていく」

「やあ、サンタクロース。実は私も同じことを悩んでいたんだよ」  
ちようど年神様がやって来た。

「お正月に一人ぼっちで、孤独な老人若者が増えているのだよ」

みんなは顔を見合わせた。

「困ったなあ、困ったなあ」

サンタクロースの袋の中は、涙色のクリスタルでいっぱいになった。サンタクロースの目から涙がこぼれた。

「ワシはいい……」

袋から「今年もまた終わっちゃう」が零れ落ちた。

クリスタルが云った。

「僕は此処に残るよ。クリスマスやお正月じゃない日に毎日落ちてくるひとりぼっちのクリスタルたちが迷子にならないように待っていてあげないとね」

サンタクロースは、涙をぬぐった。

「ワシはなんて無力なんだ。さあ用無しのワシらは帰ろう、赤鼻のトナカイよ」

エンディングスターティンと年神様は、サンタクロースと握手しながら云った。

「サンタクロース、貴方は子どもたちの夢。夢の裏には悲しみもあるのですね。

我々は、其の悲しみを喜びに変える魔法を見つけないとなりませんね」

「其れは、我々の仕事でしょうね」

「力を合わせて、祈りを捧げて」

「この世の中から悲しみがなくなりますように」

みんなは、固く手を握り合った。

けせらんばさらん、とーんだけ



## 新時代の決意

原 誠

2019年、5月1日、水曜日。第126代天皇に徳仁様が即位して新元号が『令和』に改元された。

令和の典拠は、日本最古の歌集「万葉集」の巻五、梅花の歌三十二首の序文から引用された。

初春の“令”月にして、気淑く風“和”ぎ梅は鏡前の粉を披き、蘭ははい後の香を薫らす。

この文を解説すると、花の美しさをたたえていることを踏まえ、指先をゆっくり開く動きには、春先につぼみが開いて花が咲く様子を、その手を前に押し出す動きには「未来へ進んでいく」という意味が込められているそうだ。

新時代を迎え、作家の仕事を通して未来へどう進んでいくかを自分に問いただした。

現在、名古屋で学童を対象とした将棋教室3か所で指導。妻子を養うために介護の仕事までやっている。

作家の仕事は、年1回の「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」の愛知県審査員を務めたり、会員制の「将棋ペン倶楽部」に読み切りエッセイを年4回程度の執筆をしているに過ぎない。

「クラブのために頑張ってくれ」と、故龍一京先生から激励を受けて、時代官能小説を雑誌に発表して静かにデビューした。しかし、弟子として師匠の期待に応えるだけの仕事をしていないのが事実だ。恩返しをしなければいけないのだ。

奇しくも同じ年齢の矢月秀作氏は、追いかけるにも後姿が見えないくらいに活躍をされている。嬉しさもあるが、自分への悔しさもある。とにかく頑張って作家の仕事を増やさなければならぬ。

諸般の事情により、先送りを申し出て長編小説の依頼をしてくださった出版社に頭を下げる営業活動を開始しようと考えています。

前述した作家の仕事に弾みをつけるために、令和元年から東海地区の有名書店の一つである正文館書店で、(株)一期ブックスの北川社長や絵本画家のはまださわか氏のご協力を得て、「将棋講座イベント」を展開。「将棋いろは」と題する冊子を作成し、サイン入りで販促活動もしています。依頼があれば、日本全国の書店にお邪魔します。

文芸随筆に掲載された、原誠の作品を読んで頂いた出版社や新聞社の方々には大変心から感謝しています。

「どうか、長編小説の仕事で原誠を使ってやってください。」

将棋を覚えたのが遅くて、奨励会受験も断念してプロ棋士になる夢は叶わなかったけれど、努力が実りプロ作家になる夢は叶えることができました。

令和の時代は、もっともっと作家活動を飛躍させて、明るく楽しい未来へと進んでいきたいと思います。

節目

矢月秀作

先日、若いのが遊びに来ていた時、ちょうど一九六四年の東京オリンピックの特集をやっていたので一緒に見ている。

「わしが生まれた年は、この年や」

そう言うと、若いのは目を丸くして、

「えー！ マジっすか！」

と、まあ、ここまではよかったです。次にこの一言。

「もう、生き字引ですやーん！」

……………。

令和の子と話すことがあれば、昭和生まれの自分たちが明治生まれのおじいさんと話しているようなものだから、驚くのも無理ない話です。

それでも、生き字引はねえだろう……と思いましたがね（苦笑）

また、こないだまでWOWOWでアニメの『宝島』をやっていました。

私はこのアニメが中学生の頃からバイブル的に大好きで、シルバーに憧れる少年ジムの気分でわくわくし、時にモチベーションを上げていたわけです。

が、十数年ぶりに見てみると――。

すっかり、少年ジムを微笑ましく見守るシルバーの目線になっていました。

そうだろうな、と思う反面、ちょい哀しくもあり……。

平成から令和に変わったこの年。私自身、自分の年齢や立ち位置について、いろいろ考えさせられる年となりました。

自分の中では、まだまだ上を目指す若者のような気分でしたが、気がつけば、業界でも様々な歴史を知る長い人間になりつつあり、追われる立場にもなっています。

この数年、そうした現実をひしひしと感じていたんですが、いや、まだまだ！と、寄る年波に抵抗していました。

しかし、前述したこと以外にも、年齢というものを感じさせられることが、まあ多くて、認めざるを得なくなりました。

新しい時代を迎えるにあたり、神様が「おい、そろそろみっともねえぞ」と、大なたを振るったのかもしれない。

おかげで、令和元年の年の瀬、ようやく現状を受け止める覚悟ができました。

ガツクリくるんじゃないかなあ、と思っていたんだけど、思いのほか、心身がスツと軽くなり、爽やかな気分です。

一抹の淋しさはあるものの、令和の時代、自分がどう歩んでいくべきか、少し見えたような気もしています。

この時代の節目は、私にとっても、人生の節目だったのかもしれないね。でも、それでいいのです。

生きていく中で、自分にとっての大きな節目というものが何度かあるものです。

その時は、ほんと、おもしろいくらい、周りの状況が一変するので、大事にしてきたものがすべてなくなるような強い孤独を感じるものだけど、翻れば、それはまた新たな何かをつかむための大掃除でもあるわけ。

ああ、またこの時が来たのか——と、しみじみしてしまいました。

新しい何かとあったところで、やることは変わらないんですが、仕事への取り組み方や作品の中身などは、少しずつ変わっていくんだろうな、と感じています。

どう変わるのかは自分でもわかりません。

けど、流れに身を任せつつ、令和の時代を歩む自分の変化を楽しみたいと思います。

第二章  
自由題

## オネエ言葉。

芦川淳一

わたしは、気のおけないひとたちと歓談していると、たまに「オネエ言葉」が出てくることもある。

オネエ言葉とは、辞書には「女性特有の語尾や言いまわしを強調した言葉遣い。男性が使用する場合にいう。」と書いてある。

「……なのよねえ」とか「……だわ」とか「あらあ……」など女性が使う言葉が、ときおり口をついて出てしまう。

わたしは「オネエ言葉」を意識的に使っているわけではなく、自然に出てくるのだ。いってすぐに自分で「オネエ言葉」を使ったと気づく場合もあるが、ひとに指摘されて初めて知ることも多い。それがなぜなのか、よくわからなかった。

役者は、役になりきると、なかなかその役の癖が抜けないというが、わたしは、芝居で女性やニューハーフなどの役を演じたことはない。そもそも、芝居は高校時代に、ほんの少しやっただけだ。

なぜ、わたしは会話しているときに（たまにだが）「オネエ言葉」が出るのか？ ……この長年の疑問に、最近、ひとつの解答らしきものがひらめいた。なにかきっかけがあった気がするが、それは忘れた。解答とはいっても、あくまでも、そうではないかということ、これが正解というわけではない。だが、正解にもっとも近い有力な答えといえそうだと。

わたしが小学生だったころは、アメリカのテレビドラマが数多く放送されていた。『ローハイド』『ライフルマン』『サンセット77』『ルート66』『宇宙家族ロビンソン』『奥さまは魔女』などなど。

なかでも、わたしが大好きだったのは、日曜日の夜に放送されていた『バークにまかせろ』だ。運転手付きのロールスロイスに乗った警部エイモス・バークの推理と活躍を描く明るいミステリードラマである。主演はジーン・バリ。『バークに

まかせろ』の前は、西部劇で『バット・マスターソン』を演じていた俳優だ。この『バークにまかせろ』のバークが「オネエ言葉」を使っていたのだった。もちろん日本語吹き替えで、声は若山弦蔵だったが、英語でも女性っぽい言葉づかいをしていたのに違いない。表情や仕種も少々オネエっぽかった。ただ、バークはゲイではなく、かなりの女たらしだ。なぜ「オネエ言葉」を使うのか?……上流階級のぼんぼん育ちのせいで、なよなよしてしまったのか? それはよくわからない。ともかく、そんなキャラだったのである。

小学生のわたしは、よくバークの真似をしていた。そのせいで「オネエ言葉」が出てくるのかもしれないと気づいたのである。いや、かもしれないではなく、いまでは、そうに違いないと確信している。

原因がわかって、実にすっきりとした気分だ。

かくも、子供のころに好きでやっていたことは、その後の長い人生に、少なからず影響を与えているのである。

金沢は文学的香りが溢れる街

工藤哲椰

人生の第三ステージは、北陸の地方都市である石川県金沢市で生きています。

以前は、埼玉県さいたま市で暮らし金沢へ十二回程旅行していました。次第に、独特の雰囲気がある街へ移住したい想いは、風船へ空気を入れるように膨らんでいき、平成三十年（二〇一八年）四月に実行できました。

住居は、サービスタ付き高齢者向け住宅です。

日々生活していく中、旅行では知り得なかった人々や食べ物、風土や文化施設等と出会うことで、感激・感動・感服しています。

特に文学的な香りが、街中に溢れている雰囲気を心身共に感じ染み込ませていきます。

一・文学的な香りを自然に出す施設

文学関係施設の主な建物は次の通りです。

・石川近代文学館Ⅱ石川県ゆかりの文学者の著書・原稿・愛蔵品等が集まっている。

・金沢文芸館Ⅱ金沢の文芸活動の拠点と発信基地となっている。一階は交流サロン、二階は金沢五木寛之文庫、三階は文芸フロアとなっている。

・泉鏡花記念館Ⅱ浪漫と幻想の世界を紡ぎ出し、浪漫主義文学の大家となった鏡花の作品や資料等が展示されている。

・徳田秋聲記念館Ⅱ自然主義文学の代表的な作家となった秋聲の作品や資料等が展示されている。

・室生犀星記念館Ⅱ不遇な出生をのりこえて書かれた詩・俳句・小説・随筆や資料等が展示されている。

・西茶屋資料館Ⅱ大正期の作家・島田清次郎の作品や資料等が展示されている。

・金沢湯涌夢二館Ⅱ独特の画風と詩境で先駆的な作品を生み出した竹下夢二の作品や資料等が展示されている。

二・小説や詩の創作講座を実施

前述の金沢文芸館では、各種文芸に関する講座を開いています。その中で、「小説講座」と「詩入門講座」を受講し文才向上に努めました。指導を受けた作品は、毎年四月発行の『金沢創作工房』に掲載されます。

三・作家・五木寛之氏が暮らして直木賞を受賞した街

五木氏は、金沢に四年間暮らしました。

その間に、「蒼ざめた馬を見よ」を発表し、第五十六回直木賞を受賞されました。

金沢を離れてから「金沢あかり坂」を発表されました。この作品には、金沢の街並みや生きる人々の息遣いや生活・風土が見事に描かれています。

金沢は「加賀百万石」として栄え、伝統文化・芸能を脈々と引き継ぎ、独特の街を作り上げた素晴らしさを感じ取ることが出来ます。

惹きつけて止まない、特別な魅力が存在していることも分かりました。

金沢で暮しながら心身共に「本気・根気・勇気」を持っています。文才向上を目指し、全力で小説等の作品に取り組んでいます。

## 乳首の価値は

橘 真児

CSフジテレビで放送されていた「もっと温泉に行こう！」という番組で、あれ、乳首が映ってないぞと気がついたのは、かなりの本数を視聴したあとだった。

これは私が、モデルのおネエちゃんがパンツを脱ぐ場面のみ注目していたからであろう。それも、クロッチの裏地の汚れをチェックするために。コマ送りをしてシミらしきものを発見したときには、感極まって随喜の涙をこぼしたものである。よって、乳首が見えようが見えまいが、正直どうでもよかったのだ。

そもそも、私はおっぱいそのものに興味がない。仮に綾瀬はるかがナマ乳を放り出して迫ってきてても、あっちへ行けとあしらえる自信がある。

おっぱいですらそうなのだ。私は、乳首に何ら価値を見出していない。あれを必要としているのは、乳飲み子だけだと思っている。

ところが、世の中には乳首至上主義というか、くだんの突起が見える見えないで大騒ぎをする連中が存在する。男であればどうにか見えないかと血眼になり、女であれば決して見せまいと躍起になる。正直、私には理解できないよ。

ただ、男が乳首を見たくなくなるのは、女が見せまいとするためではないのか。実際、グラビアアイドルなり女優なりが、肌を大胆に晒しているにもかかわらず、バストトップだけは執拗に隠す場面が多く見受けられる。まさに乳首隠して尻隠さずだ。

あんなにも視線を拒絶されたら、かえって見たくなくなるのが人間の心理である。河童やツチノコなど、存在が疑われるものを懸命に探すのと似たようなものだ。この場合、乳首はUMAに等しい。

では、この事象を女性の立場で考えてみよう。

彼女たちが乳首を隠すのは、見られたら恥ずかしいというのが一般的な理由らしい。しかし、それだけでは説明できない光景を、かつて目撃したことがある。

一般的なグラビアビデオよりも過激な、「着エロ」というジャンルがある。その某作品で、乳首を決してあらわにしないのに、肛門は平気で見せていたモデルがいたのだ。彼女にとって、乳首は尻の穴以上に恥ずかしいポイントということになる。

この価値観に賛同できる女性が、果たしてどれほどいるのだろうか。

ひとの考え方、感じ方は様々である。肛門よりも乳首が恥ずかしい女性がいても不思議ではない。

だが、決してバストトップを晒さなかったあのモデルは、乳頭部分にツチノコを隠していたに違いないと、私は睨んでいる。やはり乳首はU M Aなのだ。

恍惚の人

聖 龍人

世はまさに新型コロナウイルスによるパンデミックのなかでこれを書いていきます。

昨日、志村けんが亡くなりました。

マスクなどが一斉に報道してますねえ。冥福を祈るだけです。

さらにこの報道でショックだったのは、私より一歳だけですが年下だと知ったからでした。さらに、その前に友人作家の菅田龍一氏が亡くなっていました。彼も年下です。

自分より若い人の訃報がこんなにも辛いとは、若い間は知る由もありませんでした。まあ、若さってのは、能天気とも書きますから。書かねえか……。

というわけで、年齢が嵩んだときに気になるのはポケですね。もちろんウィルス感染も気になりますが、まあ、それは置いていて。

こんなことをいうと、

「本人はポケてしまってる。つまりどんな言動を取っているのか気がつかない。そうなったら怖いもの知らずだからどうでもいいよ」

という人もいるでしょうが、スタイリストの私としては、最後がポケポケでうんこ垂れ流しは嫌だなあ。

つつい、ベッドの上でのたうち回っている自分を想像してしまうわけです。ウイルスも怖いけど、ポケも怖いでしょ。

そこでポケ防止についてちよいと調べてみました。

一番いいのは、歩くことらしいです。脳は歩かないと、

「これで終わりだな……」

と勘違いをしてしまうというではありませんか。これで終わりということとは、生活するための脳の働きを放棄するということでもあるでしょうねえ。

歩くのが嫌いな私としては、これはいけない、すぐ歩くぞ、いま歩くぞ、これから歩くぞ、と決意をした瞬間、思い出しました。外出自粛のときであることを……。

せつかくその気になったのに、なんだよ、と愚痴りながら他の方法を探してみます。

森林浴がいいとのこと。健康雑誌などでもフィトンチッドには精神的に落ち着かせてくれる癒やしの効果がある、とはよく聞く話です。念のために書いておきますが、フィトンチッドとは樹木などが発散する化学物質。ならば、クマさんと一緒に森に行こう。クマさんとは友人のあだ名です。

でも、ここでまたまた思い出します。そう、外出自粛のとき……。

「ううむ、どうすればいいのだ」

頭を抱えた私はさらに調べます。すると、檜の香りが脳の海馬を刺激すると知りました。海馬は記憶などを司っている器官。そうか、檜風呂に入りたがるのは、そのためか。

でも、そんな風呂桶を買うにはそれなりの条件が整わなければならぬし、面倒だ。

次を探します。

と……他人との交流をよくしている人は、海馬も大きくボケにくいとのこと。しかし、いまは……。

さらにさらに音読がいいらしい。

ならば、声を出して本を読もうか。それもなんだか面倒だなあ、と思っていると、ツルツルしていて触って気持ちのいいものに触れると、気持ちが落ち着くようになりました。惚けとの関係はよくわからないけどねえ。

と、このとき電撃が走り、突然川端康成の「片腕」を思い出しました。

日本人なら誰でも知っている話と思いますが、主人公が娘から一晩、片腕を借りるというなんともふとどきで羨ましくもある話なのです。

ああ、私もあの人から片腕を借りたい……。

そして……小説の主人公のように、借りた片腕を撫でたり、指をしゃぶったり、自分の腕をもぎ取りつけ替えたり、あらぬ妄想が次から次へと浮かんできます。

## 第二章 自由題

そこで、私はハタと気がつきます。  
なんだ、これが本当の恍惚の人じゃないかいな。

三山 冽（北山悦史）

真っ青な空に、かぞえきれない数の赤トンボが、飛んでいます。

里の木の多くは、次から次と、枯れ葉を落としています。

2人の男の子が、熊手で枯れ葉を集めています。

1人の男の子と2人の女の子が、両手にいっぱい枯れ葉をかかえて、運んでいます。

「おい、持ってきたぞー」

男の子が、ザルをかかえて走ってきました。

「おーっ、来た来た」

「わーっ、来たわ来たわ」

こちらにいたみんなは、手を叩いて喜びました。

ザルには、サツマイモが入っています。これから焚き火をして、おイモを焼いて食べるのです。

地面に、枯れ葉が敷かれました。

その上に、6本のサツマイモが並べられました。その上に、枯れ葉が積み上げられました。

あとは、火をつけるだけです。

と、そのときです。

どこからともなく、貧しいなりをしたお坊さんが、現れました。手には、灰色の布袋を提げています。

「ちよいと、ごめんなさいよ。お邪魔しますよ」

お坊さんは、積み上げられた枯れ葉をつかみ取ると、袋の上で、ガサガサ。

違うところからつかみ取ると、袋の上で、バサバサ。

また別のところからつかみ取ると、袋の上で、ザサザサ。

揺すってはもとに戻し、振るってはもとに戻し、しています。

子どもたちはみんな、黙って見ています。いつものことなので、慣れっこになっているのです。

「こうするとな、ゴミが落ちて、葉っぱが、よく燃えるんじや。そうするとな、うんまい焼きイモが、出来るんじやよ」

お坊さんはそう言っていますが、本当のことかどうかは、わかりません。

枯れ葉をぜんぶ、袋の上で振るったお坊さんは、

「はい、おしまいじゃ。お邪魔しましたな」

と言って、立ち去りました。

## 第二章 自由題

これから焚き火をしようとしている10か所を回ったお坊さんは、布袋をかついで、深い山の中に行きました。

こんな山奥では、だれも焚き火などしません。

お坊さんは、枯れ葉がふんわり積もっているところで、止まりました。そうして、袋をさかさにして、ばふばふばふと、振るいました。

爪ぐらいの大きさのもの。

見えないぐらい小さいもの。

黒いの。

白いの。

赤っぽいもの。

緑色をしたもの。

光っているもの。

それはもう、いろいろなものが落ちています。

「ここなら安心じゃ。春までゆっくり、お休み」

お坊さんは、焼かれるところだった虫たちにそう言って、枯れ葉をどっさり掛けてあげました。

村のはずれに、お地蔵さんが建っています。

焚き火の煙が、ここからでも5つ、6つ、見えます。

山から下りてきたお坊さんは、お地蔵さんの中に、すーっと入ってゆきました。

「虫地蔵」です。

近隣相似の罪則

藪野 豊

昇天会館で厳かな告別式を終えた。新たな未亡人の多満子は、霊柩車内に収まっ  
てからやっとこう本音を吐いた。

「こんな急死でも、みんなは納得したのね」

「そりゃあ八十七歳だもん。不思議がることはないだろう」

長男の敬一が、ネクタイを少し緩めながら感想を言うと、ついさっき空港から駆  
け付けたばかりで、まだ平服のままにいる次女の洋子には聞こえたふうもなく、ず  
っと棺に身を寄せたままでつぶやいていた。

「お父ちゃん。わたし、ここにいるわよ。聞こえる？ 帰って来たのよ」

羽田に降りて四時間、やっと間に合った。

霊柩車は焼却場まであくまでも静かに走り、停車すると、白手袋の職員が後部ドアを揚げた。

黒服の男性四人が炉の扉前まで台車を進めると、一同はそれをやや遠巻きに囲み終えた。

最後の焼香を促すべく、職員がおもむろに、

「それでは——」

と言い終えたのかどうだったか。

スマホが少なくとも二つ、着信音を発した。

「えっ、なに？」

「みなさん、ちょっと待ってくださいっ」

敬一がなぜか険しい声で雰囲気を破った。「焼香しないで——」

親族一同がいぶかる間もあらばこそ、外に砂利の音を立てながらタクシーが停まった。

バターンと車のドアが閉められた。

「お客さん、あっ」

料金など何のその、降りた人影は一同の目の前に入って来て喚いた。

「オレだっ」

なんとすぐ前の棺に収まっているはずの山口有三が、そこに仁王立ちになったのだ。

「え？ 信じるも信じないもあるものか。ワシはここにいる。まあまあ泣かんでいい」

多満子と長女の美恵が左右から取りつき、ピジャマに顔を埋めて肩をゆすつていた。

「さあさあ、引き上げようじゃないか。わしはこんなところに居たくはないぞ」

「そうだろうけど、ちよっと」

と敬一がいずまいを正して一同に向かった。

「よく分かりませんが、何かの間違い——」

「ああ、もういい。お前は後始末が気になるのだろうが、構うな。混乱が起ころうが、何が始まろうが、私たちに責任はみじんもない。取り違えを起こしおった連中

が、全ての責任を執るはずだ。あとで謝罪があるだろう。私たちにすることは何も  
ない。さあ、行くぞ」

山口家には時ならぬ賑わいが生じていた。

「デリバリーが届きましたよ。それぞれで取ってください」

孫の俊二は、会社で総務を務めるから、手際がいい。

「——病院のね、同室にワシと極めて似た患者がいてね、とにかくよく間違えられ  
たのだ。え？ 結局、こんなことまでやらかしおった」

有三の表情は忌々しさの歪みで溢れた。

「ワシの哲学だ、『隣接・相似の誤認』則。赤ん坊の取り違えだって翻訳の誤訳だ  
って、この法則に依るのが多い」

「ちよっとむつかしい——」

「そうか。すぐ分かるさ。で、おまけにだ、最近は行き届いた、いや行き届きすぎ  
た扱いが多すぎる。終活？ 本人がまだよく考えてもいないことまで、至れり尽く

せりだ、なんて勝手にやっちゃおう。ありがたいもんか、そんなの。死亡届も埋葬許可も、みんな業者が——」

「あなた、そのピジヤマ、もう着替えたら？」

「ああ、——」

上下を脱いで下に置いたのを、多摩子は器用にたたむ。

「あっ。ズボンに『荒木』って——」

「やっぱり。あれが死んだんだ。弱ってたよ。右端のベッドだった」

「同室の人のこと？」

「そうよ。よく似てるって言われるのはいいが、脳検査の全身麻酔まで、実は付き合わされたんだ。ワシが醒めないでいる間に、多分、取り違えが起こったんだ」

「全身麻酔まで？」

驚くのが当然だろうが、それにしても、

「どうして分かったの？」

「気づいたら第一、ベッドが違った。第二にだ、配膳の名前が違った。『山口だ』と言ったら、『ご冗談を』だってさ——」

——外に激しい音。やがて救急車の警報。

「ほらまた。アクセルとブレーキとは同じ右足、同じ動作だからだよ」

## 第二章 自由題



### 水パイプをくゆらすクウェートの人達

川田きし江

クウェートは、北と西にイラク、南にサウジアラビアと国境を接し、東ペルシャ湾に面している。

日本の四国よりやや小さい国土の大部分が平坦な砂漠にある。

クウェートは「小さな城」の意で、18世紀に遊牧民が定住し、1960年代に油田を発見した。

1990. 8～1991. 2に渡って湾岸戦争が勃発し、800以上の油田が火災に見舞われ大被害を受けたが石油収入により近代化されたので、首都クウェート市は、超高層ビルなど、モダンな建物が林立。

それらはタイル張りの伝統的なモスクのドームを感じさせる雰囲気がある。ロータリーをはずれしばらく走ると、砂漠の中にラクダがいるのを見つけた。ラクダの赤ちゃんが生まれたばかりであった。砂地にうずくまり、母ラクダはすり寄って乳を探したりしていた。

文芸随筆 第 50 号

発行 令和 2 年 6 月 1 日

発行人 矢月秀作

編集人 小川洋（戯作舎）

発行所 日本文芸家クラブ

HP <http://nihonbungeikaclub.jp>

Email [nihonbungeika@gmail.com](mailto:nihonbungeika@gmail.com)